

江戸の町と人びとの暮らし

静岡大学教育学部教授 小和田哲男

1 家康による江戸の町づくり

徳川家康が江戸に入ったのは天正18（1590）年8月1日のことであった。この年、豊臣秀吉による小田原攻めがあり、小田原城に拠る後北条氏を滅ぼした論功行賞として、後北条氏の遺領を家康が受け取ったからである。

家康は、はじめ、その小田原城か、源頼朝ゆかりの鎌倉を本拠にするつもりでいたらしいが、秀吉の強い勧めで、江戸に決めている。もっとも、その段階では、太田道灌以来の江戸城はあったが、平川村・宝田村・千代田村などの漁村が点在するだけであった。

しかし、そのことは逆に、それまでの既成の町にしばられない、まったく新しい構想の下に新しい町づくりができる可能性を秘めたものでもあり、事実、家康は、新たな都市計画のもとに町づくりをスタートさせているのである。

家康は、図1に示したように、まっさきに道三堀という運河を掘らせている。それは、築城物資を江戸湊から江戸城近くにまで運ぶためのものであったが、同時に、その運河の周辺に人が集まり、町がつくられることを計算したもので、事実、道三堀を中心に新しい町ができ、これが、「下町」の出発点となっている。

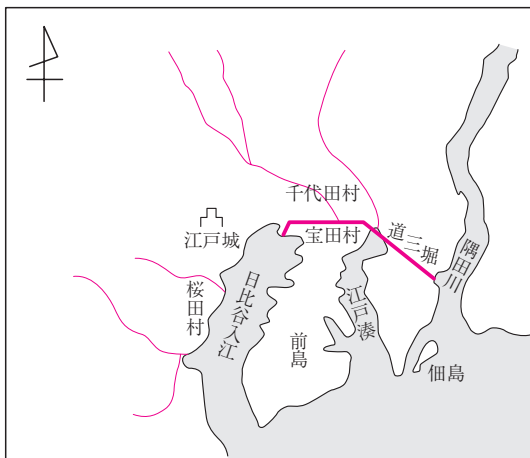


図1 家康入城当時の江戸

そして、そのあと家康は、葦や葎がはえているだけの日比谷入江の埋め立てに着手し、今日の皇居外苑・丸の内・霞が関・日比谷公園・有楽町から新橋にかけての一带ができ、そこに家臣たちを住まわせている。

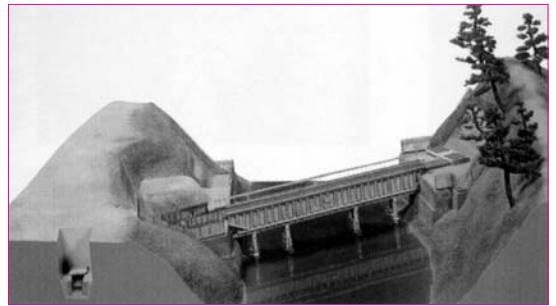


図2 神田上水掛樋

(帝国書院『中学生の歴史（最新版）』p.95④)

ただ、「下町」にしても、埋め立て地にしても、海岸線に近く、井戸を掘っても海水まじりで飲用に適さないという不都合が生じた。人口がふえれば、飲料水の確保は不可欠なことで、家康は、家臣の大久保主水忠行に命じ、武蔵野の吉祥寺の池水を上水道とする工事をはじめさせた。これが神田上水である（図2）。ちなみに、主水はふつう「もんど」と読むが、家康は、水が濁るのをきらい、わざわざ「もんと」と読ませたという。

2 日本の首都としての江戸

慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いで家康が石田三成らの西軍を破り、その3年後、征夷大將軍になったことで、政治の中心は、それまでの大坂・伏見から江戸に移り、大名たちが江戸に屋敷を設けるようになった。しかも、参勤交代が制度化されてからは、各藩の藩士たちのかなりの部分が江戸に常住する形となり、武家人口の増加をもたらした。

もちろん、江戸が政治・経済の中心地だったこともあり、商人・職人たちの流入も多く、開幕当初は約15万人だった人口が、17世紀末から18世紀初頭の段階で武家人口50万、町方人口50万、合わ



- ① 日本橋
- ② 江戸城本丸 将軍の住まいがおかれていました。
- ③ 大名屋敷

図3 江戸のようす (帝国書院『中学生の歴史(最新版)』p.95③)

せて100万の大都市に成長しているのである。あのロンドンですら、18世紀初頭の人口が50万人といわれているので、文句なく、江戸は世界一の人口を擁する都市となっていた。

ただ、武家人口50万、町方人口50万という、それぞれの屋敷地が占める割合も半々と考えてしまいがちであるが、江戸の総面積の約70%を大名屋敷および旗本などの屋敷地が占め、残りの30%に町方人口50万がひしめく形だったことにも注意がはられなければならない。厳然とした身分制がそれぞれの屋敷地の広さにも反映されていたのである。

その点は、図3から読み取ることが可能なので、少しくわしくみておきたい。

この江戸図屏風からもうかがわれるように、将軍の居城である江戸城がどんと大きく描かれており、事実、三十六見付などを含まない内郭部分だけでも30万7,000坪(101.31ha)におよんでいる。

これは、やはり、将軍の威厳を示すため、他の大名より大きな城を必要としたからである。

江戸城をとりまくように大名屋敷が展開する。その大名屋敷も、石高が多ければ広い面積となり、低ければ狭くなる。また、大名屋敷の門も石高による格式が定められ、現在の東京大学にある赤門は、「加賀百万石」前田家の屋敷の門であった。図3から、大名屋敷の門の形・大きさのちがいを読みとるのもおもしろい。

なお、最近、東京の再開発にともない、旧大名屋敷地の発掘調査が行われ、たとえば、汐留にあった伊達家の屋敷地からは、たいやひらめなどの高級魚のほか、サザエなどの貝類、鹿・いのししの骨なども出土し、大名たちが日常、どのようなものを食べていたかがわかってきた。

ところで、この江戸図屏風には、もう一つ注目される点がある。図の右端に江戸城天守閣が描かれているのにお気づきだろうか。実は、この屏風

が描かれた少しあと、明暦3（1657）年、江戸の町を焼きつくした明暦の大火がおきており、天守閣は焼けおち、その後、財政難などを理由に再建されなかったという経緯があるのである。明暦大火は「振袖火事」の名で知られているが、江戸は火事の多いことでも知られていた。

3 商家と庶民の暮らし

江戸の人口が急増するにともない、商人や職人たちが続々と江戸へ移住してきた。家康がもといいた駿河・遠江・三河あたりからもきたし、遠く、伊勢・近江あたりからも移住して商売をはじめた者が多かった。



図4 越後屋の店内（帝国書院『中学生の歴史（最新版）』p.120①）

図4は有名な越後屋の店先の絵である。そこに「現金かけねなし」の文字がみえることでも知られている。この越後屋、屋号から、越後の人が江戸にきて商売をはじめたと思っている人も多いようであるが、これは三井越後屋で、伊勢松坂（三重県松阪市）の商人だった三井高利が、延宝元（1673）年、江戸に出て、越後屋の屋号で商売をはじめたものである。

その商家のようすが図3の江戸図屏風からもうかがわれる。大きな構えの店もあるが、概して小さい。それは、当時、間口の幅によって税が賦課されていたからである。

ところで、一般庶民はどういう生活をしていた

のだろうか。前述したように、江戸は火事が多いことでも知られており、庶民は、現在のわれわれのような持ち家願望というものがなかった。「どうせ、一戸建てをもっても、火事になれば灰になってしまう」というわけで、ほとんどが借家住まい、つまり、長屋住まいであった。

たしかに、長屋住まいは、プライバシーを守るという点では欠点があった。しかし、当時は、一つの長屋に住む者が家族のようなもので、共同井戸・共同便所の生活に不便さや不都合を感じていなかったことも事実である。もちろん、長屋には風呂はなく、銭湯に行くことになり、そこも立派な社交場であった。

4 娯楽の多様化

よく、江戸の町人たちの生き様として、「江戸っ子は宵越しの金をもたない」などといわれることがある。平均すれば、6年に1度の大火に見舞われている現実が、そのことを裏づけていると思われる。そもそも、貯金をしてマイホームを建てようとか、立派な家具を買い揃えようなどという発想がなかったのである。そして、その分が遊興費として使われることになり、そこに、都市中心の町人文化の花が開くのである。

庶民たちの遊興として、まず歌舞伎があげられる。市川団十郎などのスターが輩出した江戸歌舞伎は、当

時の江戸市民の文化を代表するものであった。人形浄瑠璃・義太夫も同じである。

そのほか、相撲や夏の花火、寺社の御開帳や、地方の寺社の御本尊などの出開帳も人気をよんだ。

また、仲間うちで、川柳や俳句の会を作ったり、連れだって三十三観音めぐりなどに出かけるのも、庶民にとっては心身のリフレッシュになっており、近いところでは大山詣で、遠いところではお伊勢参りや、富士登山なども次第に盛んになっていったのである。